

## 共時態と通時態

今野真二

---

### Abstract:

#### Synchrony and Diachrony

It is common practice in linguistics to distinguish between a synchronic and diachronic approach to observing and analyzing language. In practice, however, there are some forms of observation and analysis that seem to lack synchronicity. In this paper I outline my current thoughts on synchronicity and diachronicity, taking four versions of the 1870 dictionary *Zōho shin-reijikai* as my topic of analysis. I also describe the concrete phase and abstract phase within linguistic observation and analysis

### Keywords:

Synchronicity, Diachronicity, Writing, *Zōho shinreijikai*

---

### 要 旨 :

言語の観察・分析において、「共時態」と「通時態」とを分けてとらえることは言語学の常道といってよい。しかし、実際には、「共時態」がはっきりと設定されていないようにみえる観察・分析もあると思われる。本稿では、明治 3 (1870) 年に刊行された『増補新令字解』の 4 つの版を具体的な観察・分析対象にして、「共時態」「通時態」ということについて、現時点で稿者の考えていることを整理し提示することを目的とした。併せて、言語の観察・分析における「具体相」「抽象相」についても述べた。

### キーワード :

共時態・通時態・書記・表記・漢語辞書

## 1. はじめに

『言語学大辞典』第6巻「術語編」(1996年、三省堂)の見出し「共時態」には次のように記されている。

ソシュールは、通時的に言語の変化を扱うのは言語学の一面であって、それとは峻別される別の面があることを強調した。それは、ソシュールが研究対象とするラング(仏 *langue*)を、時間の干渉すべてを排除した特定の時代という平面上でとらえ、均質な価値体系として扱う見方である。(略)そして、もっぱら一つ一つのラングの状態の記述を扱う言語学を静態言語学(仏 *linguistique statique*)、ラングの体系から体系への移行を扱う言語学を動態言語学(仏 *linguistique évolutive*)と一応呼んだ上で、ラングという同じ対象に関する2つの異なった次元の現象の対立と交点を一層はっきり示すためには、時間という観念をも組み込んだ新しい名称がふさわしいとして、それぞれを共時言語学(仏 *linguistique synchronique*)、通時言語学(仏 *linguistique diachronique*)とよんだ。ソシュールはさらに、われわれの科学の静態的局面に関することはすべて共時的であり、動態的局面に関することはすべて通時的であるので、「共時態」でラングの静的な状態を、「通時態」でラングの動的な位相を示すとしたのである。(略)言語活動はいかなる瞬間にも安定した体系と変化を前提としているのであり、共時的状態という概念はある意味で方法論的な虚構である。共時態、通時態とは、共時的あるいは通時的な言語事象そのものを指すというよりは、むしろ2つの異なる視点である。(288p-289p)

「共時態」と「通時態」という「みかた」がソシュールに始まることは明らかであるが、今、ここでは、ソシュールがどのように考えていたかにまでは遡らないこととし、引用した言説をてがかりにして本稿が検討しようとしていることがらについて整理をしておきたい。

「共時態」「通時態」の「態」は〈かたち・ありさま〉ということであろう。したがって、まず、「あるまとまりをもった言語のありさま」というものがあるとみて、それを「言語態」と呼ぶことにする。そうすると「共時態」は「共時的にとらえた言語態」、「通時態」は「通時的にとらえた言語

態」ということになる。「ラング」は「共有されている言語態」ととらえておくことにする。「共時態」も「通時態」も「共有されている言語態＝ラング」に関しての謂いであるとひとまずはとらえておく。(注1)

上記のことを具体相の中で説明してみる。

明治24年に刊行が完結した『言海』は「普通語」を見出しとしていることを謳う。『言海』が見出しとしている語が、当該時期の日本語の中で、どのように「普通」であるかを検証するためには、『言海』以外の文献を観察するしかない。『言海』の「普通語」がそのまま「ラング」ということにはならないとしても、どちらかといえばそうした傾きはあると思われる。同様に、『言海』が見出しにしなかった語がそのまま「共有されていない個人的な言語態＝パロール」(注2)ということにはならないとしても、見出しにしていない語の中にそうした傾きがある語が含まれるというみかたはさほどの外れのものではないだろう。どういう語が見出しとして採用されていないか、という検証を俟って初めて、どういう語が「普通語」として採用されているかということが評価できるといってよい。

そう考えると、「ラング」のありかたを検証するためにも、個人的に使用されている「パロール」を観察・分析対象とした言語分析はあってよいことになり、「共時態」「通時態」というとらえかたが「ラング」のみを対象としているとみる必要はないことになる。

引用した言説には「動態言語学」すなわち「通時言語学」は「ラングの体系から体系への移行を扱う」と述べられている。「体系」はままとりのある言語態ということであろう。そうであれば、「移行」なのだから、「動態言語学＝通時言語学」は「共時態」すなわち「あるままとりをもった言語態」を複数定めた上で、その「あるままとりをもった言語態」から「あるままとりをもった言語態」へどのように「移行」しているかを観察・分析することになる。

これも具体相の中で説明してみよう。

慶応4(1868)年に成ったと目されている『新令字解』という漢語を見出しとした漢語辞書を増補した『増補新令字解』という名前の漢語辞書が、明治3(1870)年に出版されている。両辞書を対照して、どのような「増補」が行なわれているかを観察・分析するという問題設定は、これまでの国語

学、日本語学においては、ごく自然に行われてきた。しかし、1868年に編まれた『新令字解』と1870年に編まれた『増補新令字解』の「編まれた」を1つの「共時態」内での言語活動とみるならば、「増補」は「共時態」内のできごとということになる。この場合、両テキストの成立は2年しか隔たっていないので、現代の分析者は、きわめて常識的に、「増補」を「共時態」内のできごととしてとらえるだろう。しかしそれは、「共時言語学」という枠組みを意識して、その枠組み内で、観察・分析を行なうということとは異なると考える。

今野真二(2022)で指摘したように、『増補新令字解』には4つの版が存在している(注3)。今野真二(2022)で「b版」と呼んだ版は、明治7年以降に成ったと推測するが、慶応4(1868)年と明治7(1874)年とでは、6年の隔たりがあり、その6年間にも、日本語はなんらかの変化をする、とみるのが言語学の常道といってよい。そうなると、慶応4年に成った『新令字解』と明治7年に成った『増補新令字解』との「異なり」はその間に進行した日本語の経時的な変化を反映したものだという「みかた」は(少なくとも仮定としては)成り立つことになる。この「みかた」はどちらかといえば、「通時言語学」的ではある。しかし、「慶応4年の日本語の言語態」と「明治7年の日本語の言語態」を設定しなければ、あるいは設定するという態度を示さなければ、「通時言語学」としての「みかた」とはいえないだろう。

今ここでは、比較的わかりやすい具体例を使って説明したが、漢字のみを使って日本語を文字化していた時期、例えば8世紀であると、テキストの具体性は希薄となり、「通時態」「共時態」という「みかた」はいっそうはっきりしなくなる。(注4)

ソシュールが設定した「共時態」「通時態」という枠組みとは異なる枠組みがあってもよい。しかしそれは、この「共時態」「通時態」という枠組みでは論じられないことがある、という主張のもとに提示される枠組みである必要がある。

本稿では、先にふれた、『新令字解』『増補新令字解』を具体例として「共時態」と「通時態」ということがらについて、現時点での稿者の考えを示すことを目的とする。また、併せて、文字・表記研究における「具体」と

「抽象」についても考えてみたい。

『新令字解』『増補新令字解』は辞書体資料であるので、「見出し＋語釈」という枠組みで資料をとらえ、「見出し＋語釈」全体を「項目」と呼ぶことにする。なお『増補新令字解』という呼称をもつテキストとしては、荻田嘯自身が単独で増補を行なったと目されるものと、内題に続いて「荻田嘯輯／東條永胤増補」と記されているものとの二つがあるが、本稿では後者を話題としている。同一共時態内で行なわれた辞書体資料の「増補」ということがらに焦点を絞るならば、二つの増補版を採りあげて考察することは考えられるが、本稿においてはまず「共時態」「通時態」について具体的に検討することを目的としているので、荻田嘯単独増補版については話題に加えていない。

## 2. 共時態の設定

『増補新令字解』と名づけられた漢語辞書に 4 つの版があることは従来から指摘されてきている。「4 つの版」であるので、見かけはいかに似寄っていても、版木が異なるということになる。

今野真二（2022）では山田忠雄（1981）が使った呼称に従い、4 つの版を a 版、b 版、c 版、d 版と呼び、「a は明治三年に、b は明治七年以降、c・d は明治五年以降明治七年までに出版されている」と推測した。（注 5）

今野真二（2022）では、4 つの版の版面がはっきりと異なる箇所として 19 丁表を図版として掲げた。版面がはっきりと異なるのであるから、版木が異なることになるが、今野真二（2022）で述べたように、漫然と版面をみる時には、さほど異なりが目立たない箇所は少なくない。それは、4 つの版が無関係に成立しているのではないことを示唆している（注 6）。本稿では、それぞれの版の 49 丁表を図版として掲げておく。目でみた版面が具体的に異なるという観察は、「具体相における観察」書記的な観察ということになる。

例えば a 版 3 項目目「總裁 スベテ／キリモリ／スルコト」4 項目目「總括 スベクハル」15 項目目「率先 サキヘタツ」の「べ」「へ」は末尾が右下方向に伸びた、特徴のある形をしている。b 版の 3 つの「へ」は a 版の特徴のある形を受け継いでいるようにみえるが、c・d 版においては、「サ

キヘタツ」の「へ」のみ受け継いでいないようにみえる。この一箇所のみで、何かがわかるわけではないが、このことは「具体相」における「ちかさ」ということになる。「具体相」において、a版とb版とは「ちかく」、c版とd版とは、a版とは「距離がある」ことになる。この「具体相における」距離の観察は、書誌学的な観察ということでもある。

49丁表は、a版は1行目に「尊藩」「尊大」を置き、1行に2項目ずつ、半丁12行で、「賊首」「賊渠」まで24項目を置いている。b・c・d版も項目数は等しい。行論のために、a版の項目に1-24の番号を与えることにする。

a・c・d版は、同じ項目を同じ順で並べている。その点において、a・c・d版は「ちかい」。b版は9「粗糲」まではa版と同じで、10番目にa・c・d版が採用していない見出し「粗食」を置き、11番目にa・c・dにみられる「粗才」ではなく「粗慢」を置く。つまり、b版には他3版にはない見出し「粗食」があり、他3版にはある見出し「粗才」がない。

図版を示さなくても、上記の説明はできる。つまり、これは「具体相」ではなく「抽象相」における「異なり」ということになる。

さて、そのようになっている理由を、「そのようになっている状態」のみから説明することはおそらくできない。つまり、上記のことを「事実」として指摘することはできるが、「なぜそうなっているか」という説明は難しい。「なぜそうなっているか」という説明を現代日本語母語話者のほとんどが納得できた時に、それを「合理的な説明」と呼ぶことにしておく。b版が「粗食」を見出しにして、「粗才」を見出しにしていない理由を上記の意味合いにおいて「合理的に説明する」ことはできないだろう。ここに言語研究の限界はある、とみておくべきではないだろうか。というよりも、言語態と無関係にそうした説明をすることは、狭義の言語研究のめざすところではない、とみるべきではないか。(注7)

さて、項目8「粗暴」に、a版は「ソマツニテ／アラキコト」(／は改行位置を示す)という語釈を配置するが、b版は「ソロウニテ／アラキコト」、c版は「ブコツニテ／アラキコト」、d版は「ソコツニテ／アラキコト」という語釈を配置しており、この「粗暴」の語釈においては、4つの版が異なる語釈を与えていることがわかる。これは図版(画像)を使わなくても説

明ができることで、それだけの「抽象度」をもっている。

a 版、b 版、c 版、d 版は異版であるので、それぞれ版ができあがった具体的な年月日、あるいはできあがった版によって印刷を行なった具体的な年月日がある。異なる場所で、版が同時並行して作成されていた可能性も、可能性としてはあるが、それはあくまでも可能性のとどまるのではないか。同時並行して版が作成されてはいなかったとみるのであれば、4 つの版について、具体的には、つまり現実世界においては「前後関係」があることになる。

今野真二 (2022) は日本語学の論文ではなく、書誌学の論文であるので、4 つの版の具体的な前後関係を推測することを重視し、a 版がまずあって、ついで c・d 版がつくられ、b 版がもっともあとにつくられた、という「前後関係」を推測した。その書誌学的な推測をそのまま日本語研究にスライドさせると、a 版の「ソマツ」を c 版は「ブコツ」に変え、d 版は「ソコツ」に、b 版は「ソロウ」に変えたとみることになる。この「みかた」はみかけ上は通時言語学としての「みかた」にみえるが、共時態を設定していない点において通時言語学としての「みかた」ではないと考える。

a・b・c・d 4 版の版としての具体的な成立には前後関係がある。しかしその前後関係をそのまま言語の前後関係とみなすことはできない。a 版が明治 3 年に成立し、b 版が明治 7 年以降に成立しているという今野真二 (2022) の推測が正しいとして、b 版の成立を仮に明治 7 年とみた場合、a 版と b 版との成立は 4 年隔たっているが、それはむしろ「共時態」としてとらえるような時間幅ではないだろうか。そして、上記の「事実」から日本語研究がまず考えるべきことは、a 版の「ソマツ」をなぜ b 版は「ソロウ」に変えた (注 8) かということではなく、「ソマツ」「ソロウ」「ブコツ」「ソコツ」が共時態内で、類義的であったという推測ではないか。(注 9)

以下では、『増補新令字解』の 4 つの版の観察をもとにして、「共時態」ということについてさらに考えてみたい。分析にあたって、『漢語字類』『言海』の記事を参照 (注 10) するので、『漢語字類』が出版された明治 2 年から、『言海』の刊行が完結する明治 24 年までを「共時態」として設定し、この時間幅の中で、考察を行なうことにする。

## 2.1 4つの漢語：「ソマツ・ソロウ・ブコツ・ソコツ」

『言海』は「ソマツ」の語義を(1)「粗ク作レルコト。精製ナラヌコト。雑」、(2)「粗略。粗忽」と2つに分けて説明している。(2)の語義は「ソリヤク(粗略)」「ソコツ(粗忽)」を掲げることで示されている。したがって、『言海』においては、「ソマツ」「ソリヤク」「ソコツ」がほぼ同義ととらえられていることがわかる。また『言海』においては、「ソアク(粗悪)」が「甚シク粗末ナルコト」、「ソジキ(粗食)」が「粗末ナル食膳(右振仮名クヒモノ)」、「ソセイ(粗製)」が「粗末ナル作り方」、「ソフク(粗服)」が「粗末ナル衣服」、「ソブツ(粗物)」が「粗末ナル品物」と説明されており、「ソ(粗)」を漢語「ソマツ(粗末)」と理解していたことが窺われる。漢字2字によって文字化される「2字漢語」においては、漢字1字があらわしている漢語すなわち1字漢語が2つ複合して「2字漢語」を形成していることになる。その「2字漢語」の造語成分となっている1字漢語「ソ(粗)」を2字漢語「ソマツ(粗末)」によって説明していることからすれば、漢語「ソマツ」はひろく理解されていたことが窺われる。明治21(1888)年に刊行された、高橋五郎『漢英対照いろは辞典』においては、「ソマツ」を和語「ワルイ」「アライ」によって説明している。

その『漢英対照いろは辞典』においては、「ソロウ」の語義を「おろそか、そまつ」と説明している。この記事によって「ソマツ」「ソロウ」が類義語として理解されていることが窺われる。

また、『漢英対照いろは辞典』は「ブコツ」を「ぶつきらぼう、そこつ、みなかふうなる」と説明しており、「ブコツ」と「ソコツ」のちかさを確認することができる。

結局、明治21年に出版された『漢英対照いろは辞典』、明治24年に出版が完結した『言海』を参照することによって、「ソマツ」「ソロウ」「ブコツ」「ソコツ」4語が類義語として理解されていることが確認でき、そうした「共時態」のありかたが、『増補新令字解』の4版の語釈のありかたに反映しているとみることができる。

## 2.2 さまざまな語形

各版の語釈が異なる場合に注目してみたい。見出しの所在はa版によって示すことにする。



増補新令字解 a 版 49 丁表

賊首 同上	賊徒 同上	遭時 同上	遭遇 同上	率先 同上	率濱 同上	粗才 同上	粗糲 同上	總角 同上	總統 同上	總裁 同上	尊藩 同上
賊渠 同上	賊魁 同上	賊巢 同上	遭逢 同上	齟齬 同上	率土 同上	粗惡 同上	粗慢 同上	粗暴 同上	總領 同上	總括 同上	尊大 同上

増補新令字解 b 版 49 丁表

賊首 同上	賊徒 同上	遭時 同上	遭遇 同上	率先 同上	率濱 同上	粗慢 同上	粗糲 同上	總角 同上	總統 同上	總裁 同上	尊藩 同上
賊渠 同上	賊魁 同上	賊巢 同上	遭逢 同上	齟齬 同上	率土 同上	粗惡 同上	粗食 同上	粗暴 同上	總領 同上	總括 同上	尊大 同上

増補新令字解 c 版 49 丁表

賊首 同上	賊徒 同上	遭時 同上	遭遇 同上	率先 同上	率濱 同上	粗才 同上	粗糲 同上	總角 同上	總統 同上	總裁 同上	尊藩 同上
賊渠 同上	賊魁 同上	賊巢 同上	遭逢 同上	齟齬 同上	率土 同上	粗惡 同上	粗慢 同上	粗暴 同上	總領 同上	總括 同上	尊大 同上

増補新令字解 d 版 49 丁表

賊首 同上	賊徒 同上	遭時 同上	遭遇 同上	率先 同上	率濱 同上	粗才 同上	粗糲 同上	總角 同上	總統 同上	總裁 同上	尊藩 同上
賊渠 同上	賊魁 同上	賊巢 同上	遭逢 同上	齟齬 同上	率土 同上	粗惡 同上	粗慢 同上	粗暴 同上	總領 同上	總括 同上	尊大 同上

a版の52丁表12行目の上には「内至（ナイシ）ソレノミナラズ」という見出しが置かれている。漢字列「内至」は「乃至」の誤りと思われるが、b・c・d版はその位置に「内室」を置く。b版の語釈は「ニヨウ／ボウ」、c・d版の語釈は「ニヨボウ」で異なる。「ニヨボウ」は古本『節用集』の1本である亀田本（明応本）が漢字列「女房」に振仮名として施している語形である。『日本国語大辞典』は亀田本（明応本）の使用例の他に17世紀の使用例を2つあげている。したがって、c・d版の「ニヨボウ」はこの語形が明治期まで使われていたことを示す貴重な例ということになる。

ケ部の見出し「荊布（ケイフ）」（62丁裏11行目下）にa版・b版は「ニヤウボウ」という語釈を配置する。c版は「ニヤウボウケン／ソン」、d版は「ニヤウ／ボウ／ケンソン」という語釈を配置し、「ケイフ（荊布）」が自分の妻をへりくだっている語であることを「ケンソン（謙遜）」を添えて示す。ここでは、4つの版いずれもが「ニヤウボウ」という語形を使っている。結局、c版・d版は1つのテキスト内で「ニヨボウ」「ニヤウボウ」を併用しており、項目「内室」において、b版に「ニヨウ／ボウ」、c版・d版に「ニヨボウ」がみられることと軌を一にする。

いわゆる「字音かなづかい」は「ニヨウバウ」であるので、例えば、b版が「ニヨウボウ」「ニヤウボウ」と文字化していることを「字音かなづかい」という枠組みで論うことはできなくはない。先に述べたように、本稿においては明治3年から明治24年を1つの「共時態」として設定しており、そのことからすれば、この「共時態」内の日本語の観察において、「字音かなづかい」に合致する「かなづかい」を採っているかいないか、ということ論うのであれば、まず、なぜ論うのか、その観察が、当該時期の日本語の観察、分析にどのように有効であるかを、仮定に示す必要があると考える。「字音かなづかい」「ニヨウバウ」を一方において、「ニヨウボウ」「ニヤウボウ」が正則ではないとみるのは、「事実」としてはそうであっても、設定されている「共時態」如何によっては「事実」の提示もさほど意義をもたなくなる可能性がある。

a版・b版は「野戦」（60丁裏3行目下）に「イクサ」という語釈を配している。明治2（1869）年に刊行されている『漢語字類』は漢字列「野戦」（121丁裏6行目）に語釈「ノイクサ」を配している。明治12年の序をも

つ『必携熟字集』もやはり「ノイクサ」(390 丁裏 8 行目)を配している。漢語「ヤセン(野戦)」の語釈として、和訓を媒介とするならば「ノイクサ」はもっとも自然なものにみえる。しかし、それを、和訓を媒介にした、(場合によっては表面的な)漢語理解とみることもできるだろう。『漢英対照いろは辞典』は「ヤセン」を「のいくさ(野原の戦争)」と説明するが、『言海』は「平場の戦(水戦ナドニ對ス)と説明する。『日本国語大辞典』も「攻城戦、市街戦、要塞戦以外の陸上戦」と説明しており、「ヤセン(野戦)」を〈野原での戦い〉に限定されないとみているのが、a 版の「イクサ」であろう。c 版は「ノヽタヽ／カイ」、d 版は「ノダヽ／カイ」を語釈とする。「ノダタカイ」は「ノノタタカイ」が複合した語形にみえるが、『日本国語大辞典』はこの「ノダタカイ」を見出しにしていない。

漢語辞書の見出しは、もともとは文の中で使われ、具体的な「文脈」をともなっている場合もあると思われるが、そこから抽出された瞬間に「文脈」から離れる。稿者は、広義の「編集」によって、「文脈」から抽出された言語を集めたテキストを「辞書体資料」と呼び、そうではなく「文脈」をともなっているテキストを「非辞書体資料」と呼ぶことがあるが、それは、「文脈」の中にあることによって、限定されていた語の語義が「文脈」を離れることによって、限定を解かれ、幅をもつということを考慮してのことであった。ある語 X が、もともとの語義 A と語義 A から後になって派生した語義 B とをもっていたとする。語義 A 語義 B いずれも備えている時期にこの語 X の語義を考えた場合、語義 A 語義 B 2 つの語義があるととらえることもできるし、もともとの語義すなわち原義は A であったととらえることもできるし、後発した語義 B を新しい語義としてとらえることもできる。これが「幅をもつ」ということで、「文脈」をともなっている語 X はその「文脈」によって具体的な語義を発現しているが、「文脈」を離れた語 X は語 X がもち得る語義すべてをもっているとみることもできる。それは抽象的な語義といってもよい。そう考えると、漢語辞書が見出しとしている漢語に配置されている「語釈」は、「語釈」を配置した人物が具体的な語義を配置しようとしているか、そうではない語義を配置しようとしているかによって自ずから幅をもつことになる。

### 3. 文字・表記研究における具体と抽象—書記と表記と

尾山慎（2021：16-17p）は「書記論」「表記」という用語及び概念について次のように述べている。

書記論は、何かが書かれるときに、そこにおいて実現するあらゆる現れを考察対象とする。すなわち字の形、濃淡、かすれ、配置、連綿があればその切れ続き、大きさ等である。一人一人、あるいは一人の中でも一回一回異なるものとしてその用例を認め、考究するのが書記論である。検討事項があまりに多岐にわたる上、産出には必ずどこかにカオスの要素が関わっている、行為そのものを考察にいれるのは時に難しい。それはつまり、書くという行為には、気まぐれや、自覚しない癖から、さらには、他の要因一机が揺れた、筆記用具が破損していた、風が吹いた、墨の掬い具合、紙の湿気度合い、果ては書き手が途中で眠気を催した一等々、その行為が実行されることに関わる要因に際限が無い。このように、我々からして不可視の要因（当人さえ意識しないかもしれない）が、しかも同時多発的に起きて、諸要素の束となってその産出行為を裏付けたかも知れないということを考慮しなくてはならなくなる—が、それを一々析出することは相当に難しい。否、実質的に不可能である。（略）

書記論とは理論上あらゆることが検討対象になりうるが、実際は、その中で主に、連綿、文字の大小、配置、字形の論あたりに収斂することが多いと思われる。なお、印刷物であれば、個人の行為ほどに揺れはないが、字の大きさや配置は手書きと同じく議論となるし、いわゆるフォントや、活版印刷ならインクの状態、活字そのものや、配置（たとえば平仮名連綿ならどれくらいの文字数をひとまとめにして組むか）など、こちらもやはり書記論的見地の考究範囲となる。

続いて表記（論）とは、そういった字の形（実現形）にまつわる要素をできる限り排除して抽象化したもの（およびその議論）を指す。（略）音韻のように完全に概念化した不可視ではないというべきかもしれないが、方法論上、個別的要素を捨象するといつていい。

稿者はこれまで積極的に「書記」という用語及び概念を使ってこなかっ

た。それは、学術的な場面での言説であれば、当然のことながら、その言説の当否を他者とやりとりすることになる。つまり他者とのやりとりが可能なかたちになっていないものは学術的な言説とはいえないと考えてきたからであった。ただし、そうではあっても、文字・表記を言語の具体相寄りに観察・分析する場合は「書記論」、抽象相寄りに観察・分析する場合は「表記論」ととらえるという「みかた」に、基本的に否やはない。

尾山慎（2021）は「書記論」という枠組み内で「検討対象」となる要素として「連綿」「文字の大小」「配置」「字形」をあげる。しかし、例えば「連綿」について述べた瞬間に、「連綿」は概念化され、その概念化をもとにした言説によって、学術的なやりとりが行なわれるはずで、実際の画像を貼りつけて、「ここがこうなっている」と述べるのでなければ、「連綿」という要素は相応に概念化するかわち抽象化されているとみることができる。そう考えると、「連綿」に関しての言説は「書記論」、「連綿」によって語や文節の切れ目をあらわすことがあるというような「分節（articulation）」に関しての言説は「表記論」と分けることに積極的な意味合いを認める必要があるかどうか、ということにならないだろうか。

尾山慎（2021）も「連綿」については「語句の分節にあたるので墨が途切れている、といった想定は時に魅力的ではあるが、それにしてもそこにまつわる不定要素（析出不可能要素）が、前述の通り、あまりにも多すぎる」（16-17p）と述べている。

「連綿」について述べるならば、それを「書記論」「表記論」のいずれの枠組み内で論うかということよりも、「和文の場合には、漢字の多用ではなく、語句の分かち書きが選択されている。ただし、分かち書きといっても、アルファベットのようにスペースを空ける方式ではなく、墨継ぎと連綿とによる分かち書きである。筆記用具が毛筆であったために、墨継ぎをした箇所は濃く、そして太くなり、あとはだんだんに細く、かすれてくるので、語句と語句との間隔を開けなくても、適切な箇所で墨継ぎをすれば境界が自然に明示されるし、墨を継がなくても、連綿するかしないかで断続が標示できる」（小松英雄（1998：70p））という言説に代表されるような、「墨継ぎと連綿とによる分かち書き」が行なわれていたという言説の妥当性が検討されるべきではないだろうか。

筆に墨をつけて紙に文字を書くにあたっては、当然「墨継ぎ」をする必要がある。また、仮名勝ちの文字化においては、ある程度の文字数をひとまとまりに書く、ということもひろく看取される現象といってよい。

小松英雄(1998)は「分かち書き」を定義していないが、「アルファベットのようにスペースを空ける方式ではないが」と述べているので、日本語以外の言語の分かち書きが一方に置かれていることがわかる。そのことからすれば、この「分かち書き」は相応に抽象的な概念であることになる。それは現代的な意味合いにおける「分かち書き」、例えば日本語に即しているならば、「文節」というような言語単位を想定した概念といってよく、そうした「分かち書き」という概念が、例えば平安時代にもあったということを前提にして、それが「墨継ぎと連綿と」によってどの程度実現しているかという検証は、そもそも「前提」の検証が必要にみえる。「墨継ぎ」をした箇所が誰にでも明白にわかる場合もある一方で、どこで「墨継ぎ」をしているかが不明な場合は多い。また、「連綿」が「文節」を超えて行なわれている例などいくらでもあり、そうしたことを、「墨継ぎと連綿とによる分かち書き」という言説はどのようにとらえているのだろうか。

さて、稿者は、文献を引用するにあたって、改行位置を「/」で示して表示することがある。それは、どちらかといえば、改行位置を「表記」寄りにとらえているということといつてよい。しかし、改行位置は「書記論」で論うものとみれば、一々それを表示する必要はないことになる。

尾山慎(2021)は「表記論と書記論という両者の関係であるが、連続性、相互包摂だ」ととらえている(17p)と述べており、そのことについても否やはない。

最後に、『増補新令字解』を例として、「書記」と「表記」について説明をしてみる。ラ部の見出し「老弱」(52 丁裏 10 行目上)に4版とも「トシヨリノワカキモノ」という語釈を与えている。漢字2字で文字化されている漢語「ロウジャク」を1字目「老」を「トシヨリ」、2字目「弱」を「ワカキモノ」と説明する自然な語釈といえよう。「ワカキモノ」は翻字をすれば「ワカキモノ」となる。実際の版面をみると、「ワカキモノ」の「ノ」は「モ」の真下にあるのではなく、少し左側に寄った位置にある。そのようにしなければならない理由は当然のことながら不明といわざるをえない。

しかし、4版とも「ノ」は同じ位置にある。これは、4つの版がかかわりをもちながら成立していることを思わせる。この観察、推測は「書記論」的な観察の枠組みの中にある。「老弱」に配されている語釈は4版とも「トシヨリ／ワカキモノ」であって、そのようなとらえかたは「表記」論的な観察の枠組みの中にあって、そこからは4つの版の成立事情を窺うことはできない。

リ部（26丁表）は「両端」「両可」「両全」「両平」「両朝」「両軍相接」という5つの項目から始まる。a版においては「両朝」の下段が空白になっていて、次の行に「両軍相接」が置かれている。b版においては、その空白に「両喜（リヤウキ）ナカフド／クチ」という項目が、c版・d版においては、「両喜（リヤウキ）ナカフド／グチ」という項目が置かれている。今ここまですべて「両」字を使ったが、b版のみ「両喜」で、「兩」字を使う。b版も他の項目には「両」字を使っており、この「兩」は入木にみえる。b版のこの「兩」が入木であったとして、しかしなぜ入木したか、理由は不分明としかいいようがない。しかし具体的な版面をみれば、すなわち「書記」論的な観察をすれば、この一字が入木されていることは推測できる。しかし、翻字された「情報」からはそのことはわからない。つまり「表記」論的な観察では、「まったくの謎」ということになるだろう。

このように考えると、翻字された「情報」から、なぜそこに「兩」字が使われているかという疑問をもち、実際の版面を確認するという「書記」論的な観察に移行すれば、少なくとも入木に際して、「兩」が使われたということが確認できる。

そうした「書記」論的な観察をせずに「表記」論的に考えたとしても、b版は「両」「兩」を併用しているので、少なくともb版においては、それぞれが使われていたということが窺われる。b版が特別な価値観をもっていないと考えれば、それがb版がつくられた「共時態」での態度であることになる。

明治2年に刊行されている『漢語字類』は部首別画数順に漢字を配置し、当該漢字を頭字とする漢語を類聚している。「本文」にさきだって、検索のための「索引」が置かれているが、「一」の部には「兩 兩ニ同シ」と記されており、「両」の条では、欄外に「兩」が掲げられ、行草書体で表示され

た見出し直下に添えられた楷書体においてはすべて「両」が使われている。このことは、「両」「兩」が併用されている「共時態」の存在を裏付ける。

このように、「書記」論的観察・分析と、「表記」論的観察・分析とは、連続している。言語の具体相における「書記」論的観察・分析と、言語の抽象相における「表記」論的観察・分析は稿者いうところの「虫瞰」と「鳥瞰」とにあたるものといってよく、今視点をどこに置いているかを分析者がしっかりと意識することによって、それぞれの意義を発揮するものと考ええる。

## 注

- (1) 「共有されている言語態＝ラング」を観察・分析対象とするということはもちろん自然なことであるが、「ラング」を設定するといわば同時に、言語の個人的使用ともいうべき「パロール」も設定されている。そうであれば「ラング」の観察・分析は、「パロール」が「ラング」に対してどのように位置づけられるかということを含む、とみることもできる。
- (2) 今ここでは、「パロール」を「共有されていない個人的な言語態」と定義したが、この場合の「共有されていない」にも「ほとんど共有されていない」から「ある程度は共有されている」まで、自ずから幅があることが予想される。
- (3) 「近代書誌・近代画像データベース」で公開されている画像の中、八戸市立図書館に蔵されているもの、早稲田大学古典席総合データベースで公開されているものがともにd版にあたる。
- (4) 尾山慎(2021)は「仮に、万葉集をひとつのテキストとして扱う、と宣言しても、結局先後関係や成立論を述べると、その瞬間、作品論的共時論の pause は解除され」、「作品論的共時論と、通時論とが、区別はされつつも、結局往還したり、対照されたり、あるいは重ね合わされたりするような向きがあるのは、作品自体が、歴史上の産物であることにもよるだろう。それは、だから致し方ない。それゆえ、避けるべきなのは、作品論的共時論が、なし崩し的に通時論にスライドしたり、通時論が行き詰まると、ご都合主義的に作品論的共時論に寄せる、



というあり方である。あるいは、スライドしたり、スイッチングしてしまっていることに無自覚というの、問題であろう」(42p-43p)と述べている。

- (5) 山田忠雄(1981)はa版→b版→c版→d版という成立順を想定して言説が構成されている。今野真二(2022)ではa版を起点として、b版が明治7年以降、c版d版は明治5年以降につくられたと推測をし、本稿もその推測に従っている。現時点では、c版とd版とではd版が先行し、c版はd版に基づいて成り、b版は少なくともd版は参照しているのではないかと推測しているが、具体的な観察が上記推測にそぐわないこともあり、確信を得るには至っていない。山田忠雄(1981: 404p)は「増補新令字解の世に行われた事は吾人の想像に絶するものがある」と述べており、4版の前後関係の見極めは難しい。また、山田忠雄が述べるように、a版に入木の痕跡が窺われる。現時点では、これはa版の校正によって生じたものとひとまずは考えているが、例えば、a版63丁表8行目上の項目「原始」は文字の色が濃く、入木を思わせる。b版は当該位置にa版同様項目「原始」を置くが、c版・d版は「競馬(右振仮名ケウバ/左振仮名キヤウ)」を置く。a版をもとにした被せ彫りによって、c版・d版がつくられているのであれば、入木の痕跡はc版・d版になければいけないが、ここではa版にある。a版が依拠しているa版と似寄ったA版(この箇所であれば、「原始」ではなく「競馬」を置く版)が存在しているとなれば、a版b版c版d版4つの版の範囲内で観察していることがらはまったく異なってくる。そうした意味合いにおいても、現存する版をもとにした観察、分析には限界があるとまず考えておく必要があるだろう。今野真二(2022)では、4版に共通してみられる刊記「明治元戊辰年刻成/明治三庚午年増補」の「明治元戊辰年刻成」の「刻成」について、『新令字解』が明治元(一八六八)年に刊行されているので、「刻成」はそれを指すと思われる」と述べた。『新令字解』には「明治紀元/辰十二月」という刊記をもつものがあることからの推測であるが、『新令字解』には「慶応四年戊辰六月上梓」という刊記をもつものもあり、このことについてはなお慎重に考える必要があるいはあるか。

- (6) 4つの版の版面が似寄っていて、かつ別版であると思われることからすれば、「被せ彫り」によって版が作られているということがまず推測される。『日本古典籍書誌学事典』（1999年、岩波書店）は見出し「覆刻本」において「既刊本を底本として、その版式通りに模して版木を作り、出版した本。覆刊本。原版本を解体して一枚ずつにし、裏返して新版木に貼り、これを版下として彫って刷るので、被せ彫りともいう。また、原版本の字様・版式を敷き写し（透写）にして版下にする場合もある」（507p）と説明している。刊行にあたっては、校正をするのとみるのが自然であろう。その校正は、作った版木を刷って紙の上で行なわれるとみるのがやはり自然で、その校正の結果、不都合な箇所を修正するのであれば、修正箇所を含む版木をつくりなおすか、修正が少ない場合は、埋木によって修正することになる。山田忠雄（1981：401p）は、「aが出発点であった事は先ず動かし難い」と述べ、今野真二（2022）も、a版がまずつくられたとみているが、山田忠雄（1981：401p）は「筆者が儼に見るaは孰れも摺刷不鮮明であり剩え入木の跡らしきものを何ヶ処にか包蔵する点からすれば、aに先立つAを予想する事が論理的には恐らく正しいであろう（b・cも摺刷は余り宜しくない）」と述べる。例えば、a版32丁表8行目の下の項目「A目 アリガタ／ソフナカ／ホツキ」（Aは草冠＋高：電子的に表示しにくい漢字字形については、 $\alpha + \beta$ で、漢字の構成要素が上下に並んでいると、 $\alpha \times \beta$ で、漢字の構成要素が左右に並んでいることをあらわし、このやりかたで可能な限り表示することにつとめる）の「A目」は明らかに「入木」であると思われる。山田忠雄（1981）のように「aに先立つA」の存在を予想することはもちろんできる。しかしまた、この「入木」は校正時によるものである可能性もあり、「入木」からどちらが「論理的」な「みかた」であるかを選択することはできない。また山田忠雄はa版を少なくとも5本みていることがわかるが、その5本が「摺刷不鮮明」であることから、「aに先立つA」の存在を予想することができるかどうか。現存しているa版すべてをみて、それらすべてが「摺刷不鮮明」であることが確認できれば、a版は「先立つA」と同じ版木を修正したものということとなる。Aを刷っているので、版面が摩滅

して、ために「摺刷不鮮明」ということであるが、山田忠雄（1981：401p）は国立国語研究所が蔵する a 版について「a の中では珍しく初刷に近い本であった」と述べており、あらゆる a 版が「摺刷不鮮明」ではないことを自ら述べている。稿者の所持している a 版 4 本の中にも、印刷面が不鮮明ではないものもある。刷りが佳良かどうかということが、書誌学においては観察点の一つであることは承知しているが、鮮明、不鮮明は極端であれば、見解に揺れは生じないが、極端でない場合は、個人の「印象」になりやすい。

- （7）書誌学・文献学的なアプローチも言語学に含まれるとみて、それを広義の言語学と呼ぶとすれば、そうした学を含まない言語学を狭義の言語学と呼ぶことになる。
- （8）「a 版の「ソマツ」をなぜ b 版は「ソロウ」に変えた」と表現した場合の「変えた」にも留意したい。この表現は、b 版の作成者（編集者）が積極的に a 版の「ソマツ」では不都合だと判断して「ソロウ」に変えたという含みをもつ。しかしそうかどうかは結局はわからないのであって、「積極的に変えた」は（前提ではなく）むしろ「主張」として提示すべきことであり、そう主張するためには、共時態内で、そのようにみることができることを示す必要があると考える。また「c の編集の粗漫を物語る」（山田忠雄 1981：391 p）「左訓の下半部を機械的に裁切った編集態度は記憶さるべきであり」（山田忠雄 1981：383p）のように「編集」という表現を使うと、論の読み手は自然に、現代的な意味合いでの「編集者」が存在していることを想起しやすく、説明のために使う表現についても慎重でありたい。さらにいえば、論の書き手による評価的表現は必要ではあると考えるが、「改善」「旧態依然」（山田忠雄 1981：384p）「無定見」（山田忠雄 1981：386p）などのように、適切な強度の範囲を超えると、現代日本語母語話者としての論の書き手の「心性」を述べたものということになりやすい。それはそうした意味合いにおいて、観察対象としている言語の「共時態」を離れた評価ということになる。
- （9）本稿においては、実際にテキストに記されているかたち（これを仮に「書記語形」と呼ぶことにする）と、語そのもののかたち（語形）と

をできるかぎり区別して論を進めたい。「ソマツ」「ブコツ」のように、鉤括弧に片仮名を入れたものは、語そのものをあらわす。その表示のしかたでは、話題としている語がわかりにくいと稿者が判断した場合は「ブコツ（無骨）」のように、漢字列を丸括弧に入れて添える。漢字列によって語が文字化されている場合は、それがいかなる語をあらわしているかがわかりにくい場合もある。そういう場合に、観察者（分析者）は自らの判断を（それが適切かどうかは別にして）論文内に示す必要があると考える。それが抽象相で論をやりとりする基本的な態度であろう。

- (10) 『言海』の記事については、「日本近代辞書・字書集」(<https://joao-roiz.jp/JPDICT/search>)を使って検索を行なった。データベースを構築し、公開している豊島正之氏の学恩に感謝します。

## 参考文献

- |      |      |                                     |
|------|------|-------------------------------------|
| 尾山 慎 | 2021 | 『上代日本語表記論の構想』(花鳥社)                  |
| 小松英雄 | 1998 | 『日本語書記史原論』(笠間書院)                    |
| 今野真二 | 2022 | 漢語辞書『増補新令字解』の版種について(古典研究会編『汲古』第82号) |
| 松井俊彦 | 1990 | 『漢語辞書の成立と展開』(笠間書院)                  |
| 山田忠雄 | 1981 | 『近代国語辞書の歩み』(三省堂)                    |